

| | |
|---------------|---|
| 氏 名 | 田 邊 俊 介 |
| 授 与 し た 学 位 | 博 士 |
| 専 攻 分 野 の 名 称 | 医 学 |
| 学 位 授 与 番 号 | 博甲第 4407 号 |
| 学 位 授 与 の 日 付 | 平成 23 年 9 月 30 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当) |

| | |
|-------------|---|
| 学 位 論 文 題 目 | F-18 FDG-PET/CT Contributes to More Accurate Detection of Lymph Nodal Metastasis From Actively Proliferating Esophageal Squamous Cell Carcinoma (食道癌治療とくにリンパ節転移診断における、PET/CT による画像診断と腫瘍増殖能をはじめとする組織学的診断との関連) |
|-------------|---|

| | |
|-------------|----------------------------|
| 論 文 審 査 委 員 | 教授 吉野 正 教授 山本 和秀 准教授 佐藤 修平 |
|-------------|----------------------------|

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

食道癌は、早期からリンパ節転移を認め、リンパ節転移の程度は予後に大きく影響する。正確なリンパ節転移診断は適切な治療法の選択のために欠くことができない。とくに手術症例では、PET/CT での術前診断と、術後病理組織診断とを対比する事が重要である。我々は、PET における SUVmax と原発巣、転移リンパ節の諸因子、ならびに腫瘍増殖能との関連について検討を行った。当院にて食道切除術を行った食道癌患者 102 例を対象とした。転移リンパ節の SUVmax と、転移リンパ節の諸因子について相関関係の有無を検討し、さらに転移リンパ節の SUVmax と転移リンパ節の腫瘍量との相関の有無を検討した。その結果、両者に有意な正の相関が認められた ($p < 0.001$)。さらに転移リンパ節の増殖能の検討を行った。転移リンパ節単位面積あたりの SUVmax (SUVmax/mm²) と、Ki LI の相関について検討したところ両者に相関が認められた。反回神経周囲リンパ節の転移診断精度の検討では、特異度が PET で 95.9%、CT で 80.5%であった。精度は PET で 87.3%、CT で 78.4%であった。PET/CT のリンパ節転移診断においては、転移腫瘍量との SUVmax との関連を念頭に置くことが重要である。また増殖能と SUVmax の関連を検討する際には、転移腫瘍量も考慮に入れる必要があることが示唆された。今回の我々の研究は、食道癌のリンパ節転移診断における PET の診断能と腫瘍増殖能との関連について述べたものであり、今後の食道癌診療においても大きな意義を持つものであると考えている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は食道癌における PET SUVmax と原発巣、転移リンパ節の諸因子、腫瘍細胞増殖能を検討したものである。102 例の解析で、転移リンパ節の SUVmax と転移リンパ節の腫瘍量に正の相関が認められた。また、転移リンパ節単位面積あたりの SUVmax と Ki 67 labeling index とも相関が認められた。反回神経周囲リンパ節の転移診断精度の検討では、特異度は PET で 95.9%、CT で 80.5%であった。精度は PET で 87.3%、CT で 78.4%であった。その結果、PET/CT のリンパ節転移診断では転移腫瘍量と SUVmax との関連を念頭におくべきと結論した。

実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、食道癌の転移診断に関する重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。